

安田 正實

今般 2012年3月をもちまして、千葉大学数理・情報数理学科を退官いたします。これまで多くの方とのご厚情に支えられて、このときを迎えることができ、至極光栄と思っております。

思えば、千葉大学文理学部の数学科学生として入学した時期は昭和40年(1965)であります。この頃、房総西線(内房線)では朝晩に一本ずつ館山と両国間にSLが走っており、西千葉と錦糸町の電化区間は通過でした。学科定員10名とは文理数学の先生方と同じぐらいの数です。クラブ活動としては、木更津第一高校というほぼ男子校(男/総数=400/420)から出てきたので、SES(英語研究会)に入り、女子と話をする楽しさ(?!)を味わいました。左の写真は2011年総会時の創立60年文集です。千葉大では



統計学、数理統計学は村上正康先生、確率論を掛下伸一先生、標本調査論を浅井晃先生からご指導を受けました。ちなみに一般教養の「統計学」の評価は「可」(優、良、可、不可のうち)でした。これは私の名誉勲章かも知れませんが…。卒業研究は大野峻象先生のもと、グリファンド/シーロフの超関数でした。一方夏休みの特訓で、有名なクラメル of 数理統計学を読まされました。おかげで公務員試験上級職に合格できました。東京千駄ヶ谷の日科技連で毎週行われた土曜セミナーでは、フェラーの確率論の輪講に参加しました。2巻目のほうで難しいものでしたが、統計数理研究所の渋谷政昭、清水良一、脇本和昌先生

たちからとても楽しく教えていただきました。1964年は東海道新幹線開通、東京オリンピック大会、舟木和夫(高校三年生)、1966年ビートルズ来日日本武道館で公演、1971年マグドナルド1号店三越に開店といった時代の頃です。

その後九州大学の大学院試験を当時防音校舎という2階建ての教室で受け、頭の上をファントム戦闘機が板付ベース(のちの福岡空港)へと飛び過ぎていました。1968年建設中の九大計算機センターに墜落炎上した驚くべき「事件」もありました。理学部数学教室は隣の建物です。1968年(昭43年)千葉大文理改組(人文、理、教養の設置)、1968年全国至るところでの大学紛争、全共闘、新左翼学生運動、70年安保改定、新宿騒乱、東大医学部、日大理工の闘争という目苦しい出来事ばかりが重なり続きですが、私は日和見主義で、適度に勉強していたのでしょう。

九大では計画数学講座に属し、古川長太先生、北川敏夫先生のご指導を受けました。熊本大学から赴任されたばかりの古川先生はキビキビと学生の指導をされ、ご自身も夜遅くまで研究室で勉強されておられました。先輩の岩本誠一先生とはマルコフ決定過程に関して午後から始めて夜遅くまで1対1のセミナーでした。内地留学研究者に新潟大学の田中謙輔先生が来られていて、かしわラーメンの食べ歩きに付き合わされ、ツブキンの学習理論で学位を取得されています。統計の工藤昭夫先生は気軽に院生室へ来られ、先生とは日産サニーに乗って博多から宮崎大学での数学会にも行きました。トポロジーの工藤達二先生からは古賀の看護学校講師を紹介され、看護学校の公用車が理学部玄関まで迎えに来てくれます。大学院の学生が乗り込むのですから、滑稽である風景でした。計画数学講座助手の南正義先生、福岡教育大の上村秀樹先生にも博多名物の水炊きをごちそうになりました。数学教室にはマドンナも数人おられました。大阪大基礎工助手であった蔵野正美先生には阪急石橋の下宿でお会いし、大阪万博を見物しました。柳川堯先生、大和元先生、岩本誠一先生とはホーエル/ポート/ストーンの3部作をそれぞれ翻訳しました。鹿児島大学に助手として赴任できたのは、推薦状を書いていただいた北川先生、古川先生、情報基礎研の加納省吾先生はもちろんのこと、大和先生のおかげであることは言うまでもありません。

鹿児島大には4年半理学部助手として勤め、また教養部の統計も教え、たくさんの思いが残っています。1975年(昭和50年)5月には千葉大教養部に移動しましたが、4月でなかった理由は、この1カ月間に確率論の集中講義をしてきたのです。その時、後の鹿児島大学理学部教授となる與倉昭治さんが受講していました。丸野隆明さんは九大大学院の数学専攻の同級生です。鹿児島高専の藤崎恒晏さんとはパチンコとボーリングをセミナーの間にコーチしてくれました。鹿児島では軟式テニスしか上達したものがありませんが、多くの友人ができ、橋口正夫先生が歌う七高寮歌「北辰斜めに射すところ」の地は思い出深いものがここには書き尽くせないほどたくさんあります。

1975年（昭和50年）千葉大教養部講師に赴任。日本で初めての千葉大看護学部発足に伴うものです。1人教室解消の一環として、教養部統計学教室は村上正康先生とともに2人で運営することになりました。「看護」とは奇異な御縁続きです。千葉大への赴任前からは、数学教室の丹野雄吉先生からは、千葉東病院の看護学校を頼まれ、また千葉医療センターとよばれる椿森の国立病院にも永く統計学を教えにきました。その後は情報科学と授業名が変更されています。話をもとに戻しますと、教養部のお偉方とは別に、嚆矢会（若手の赴任した集団、「講師」に掛けている）という集まりでも難題な運営問題を議論することになっていきます。赴任した当初から既に改組問題が長時間、教授会の議題となっていて、神経は減りますが、まったく教養部全体が合意できず困惑した時間を過ごします。いつの世にも起こる当たり前のことなのでしょうが、基本問題の責任者となったときには十二指腸潰瘍になりました。平成6年基本問題委員では、人間環境学部案をつくり、文学部と交渉合意、しかし実現せず、結局教養部解体という事態になったことは皆様のご存じを通りです。しかし理学部、教養、教育と3組織に数学関係者が分かれていたものの、現在に至ったことは、当時の理学部の皆さん、田栗正章先生、志賀弘典先生や茅島育子先生方のご尽力であります。冒頭の部活動SESでは日本語文集の題目は「絆」でした。まさに東日本大震災から1年も経たず現在は、言葉の重みとともに心にしみじみと感じ入ります。文献：[1]「教養部のあゆみ」千葉大学教養部（平成6年）、[2]千葉大学三十年史（昭和55年）、[3]千葉大学五十年史（平成11年CD）。

教養部では、やさしい例による統計学入門、ケンドールの統計学辞典、微分と積分などの翻訳と執筆、また科学大辞典、情報システムハンドブックの分担執筆にも参加できました。とくに共著の統計学演習（培風館）は初版のまま改訂もせず現在25刷となり、これは村上正康先生のおかげであることは言うまでもありません。千葉大学での研究グループとして、蔵野正美先生の指導のもと、中神潤一先生、吉田祐治先生と共同研究が多数出版にできました。また大阪大学基礎工学部、坂口実先生門下の皆さんには、いろいろな意味で御礼の申し様もありません。北陸セミナーは年に一度の一大行事でしたよね、自分の勉強進度の区切りにも大いに役立ちました。坂口先生がジョージ・ワシントン大学でおこなった講義ノートが遺稿となっていましたから、スキャンして掲載していますのでご覧いただければ幸いです（<http://www.math.s.chiba-u.ac.jp/~yasuda/sakaguchi/msakaguchi.html>）。

通算10か月間の在外研究員として滞在したオーストラリアのブリスベン（Univ of Queensland）、カナダのバンクーバー（Univ of British Columbia）のことなどは千葉大学広報1998年11月号に「一期一会」として書きました。下記のHPにも掲載してあります。http://www.math.s.chiba-u.ac.jp/~yasuda/accept/stat_edu/k1998.pdf 私が留学できた御礼の気持ちに代えて、逆に希望者の受け入れをして優秀な留学生と交流できています。他の研究室とも引けを取らないくらい人数です。いろいろな各地の国際会議にも諸先生と一緒に参加でき、現地にも有名な研究者とお会いでき、研究交流を深めることもよい思い出です。研究もさることながら、旅行に纏わる楽しい思い出、失敗談も数多くあります。税金の無駄遣いでは決してありません。右の写真は交流協定を結んだポーランド、プロツラフ工科大学から、Professor K.Szajowski からいただいたCDです。ポーランドはショパンの生まれた国ですよ、やっぱり。2011年3月東日本大震災があったので、「がんばれ日本」という日本語のシールが貼ってありました、感激ですね。



思い返せばいろいろと尽きないものがたくさんあり、お名前を挙げられなかった方々は多数になりますが、これまで多くの諸先生から賜ったご指導に感謝し、一人では何もできないものがここに至った次第はご交誼いただいた先生方のお力添えであること、また一緒に勉強した仲間、学生さん達に支えられたおかげであることを特に記して感謝申し上げます。ありがとうございました。

連絡先：yasuda@math.s.chiba-u.ac.jp

<http://www.math.s.chiba-u/~yasuda/>